

# いのちの教育を推進するための道徳教育の実践

吉本恒幸



## はじめに

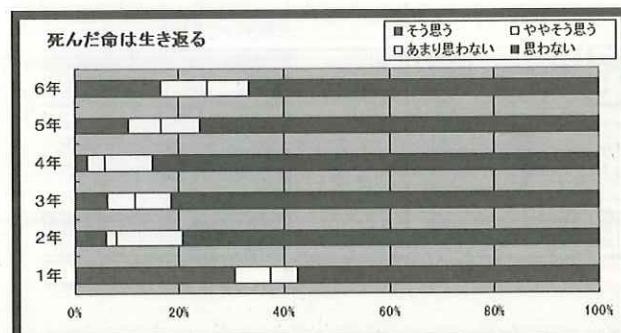
一人一人の子どもが命を大切にし、これから歩みの中で豊かに自己実現を図ってほしいとの思いは、私たち大人の共通した願いである。しかし、今日の社会では、法を無視した者にてによって突然に幼い命が奪われたり、子ども同士のいさかいから命を失くしたりする事件などが後を絶たない。

また、子どもたちの様子をみると、命の大切さについては言葉では分かっているものの、実感を伴わず、生活の中で働いていないようと思われる。命を大切にすることは、社会の中で最も重視すべき価値である。この価値が希薄であると、自分を大切にする感情が芽生えず、生きる意欲や他者への思いやりの心は育たない。未来を担う子どもたちに健全な価値観を養うことは私たち大人の責務であると考える。

現在、教育改革が急ピッチで進められている。しかし、子どもたちの生きる姿勢や学ぶ態度など根底に横たわる問題を立て直さずして、真の学力の向上はない。命の重みを問い直し、生きることと真剣に向き合い、深く自分を見つめる営みは今日きわめて重要と考える。

## 1 いのちに関する意識調査から

前任校の西東京市立向台小学校では、いのちに関する様々な設問を全児童に対して行った。以下は、その一部である。



【考察】「人や動物は死んでも生き返る」と思う子どもがどの学年にも存在する。高学年は他の学年より多く、5年生の16.1%，6年生の25.7%が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えている。高学年になれば客観的な理解や科学的な知識が増え、思考力も高まっているはずであるが、子どもの心には別の問題があることをうかがわせる。

## 2 研究主題のとらえ方

### 「いのちの大切さを学ぶ」

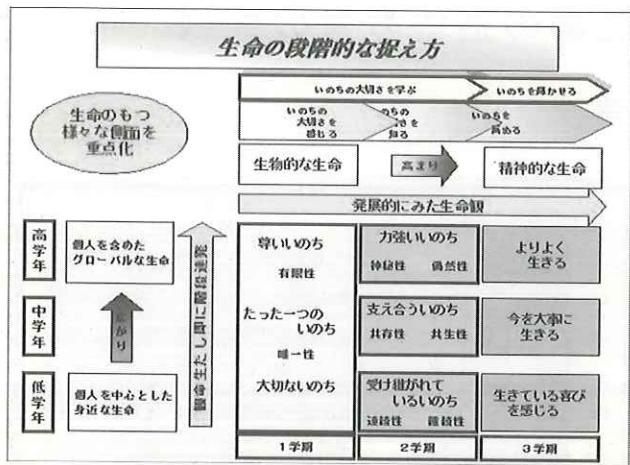
生物的な生命として捉える。生命には限りがあること、受け継がれ、受け継いでいく生命であること、また、支えられる生命であることを学ぶ意味である。

### 「いのちを輝かせる」

精神的な生命として捉える。「いのちを輝かせる」とは、死という有限性がある中で、生命のもつ価値を最大限に生かして、生きがいをもってよりよく生きようとする考え方や態度のことである。

## 3 生命の多面的なとらえ方

生命がかけがえがないのはなぜか。その観点を以下のようにまとめた。支え、支えられている生命（共存性、共生性）、1回限りの生命（有限性、唯一性）、自然的、生物的な存在としての生命（神秘性、偶然性）、受け継ぎ、受け継がれている生命（連続性、継続性）の四つである。これらを一年間の中で三期に区分して扱うとともに、小学校1年生から6年生まで、発達段階に応じて段階的に指導する構想を立てた。



#### 4 総合単元的な道徳学習を通した実践

総合単元的な道徳学習とは、子どもが道徳性をはぐくむことができる学習の場を総合的にとらえ、各教科や特別活動、総合的な学習の時間などの特質を生かして行われる道徳的価値にかかわる学習を、道徳の時間を中心にまとまりをもたせて計画し、子どもたちの意識の流れを大切にして道徳教育ができるようにすることである。

一つの大きくくりを一ヶ月ほどの時間の中で設定し、数回にわたる道徳の時間と他の教育活動とを密接に関連付けて指導する構想である。

今回の研究では、上記のいのちの構想に基づいて、1年生から6年生まで18の大単元を設定し、実践した。

#### 総合単元的な道徳学習とは

児童の道徳学習は、様々な場面で行われており、それは、学校においては、各教科・領域等の区分を離れて連続性をもつとともに、家庭や地域社会を含む生活圏において行われている。

その中で特定の道徳的価値に関する意識の流れを押さえ、児童が連続的に道徳学習を発展させられるよう支援していくとするものである。

#### 5 いのちの輝きを確かめる活動

いのちの輝きを確かめる活動は、一人一人の子どもにとって日常のすべての生活中にあるといえる。また、学校では、各学年ともさまざまな教育活動を通して意図的に取り組んでいる。

それらの中で、いのちの大切さを味わっ

たり、自らの成長を振り返り生きていく意欲を確かにしたりすることを目的とした活動を、特に「いのちの輝きを確かめる活動」と呼ぶこととした。以下は、その中で位置付けられた動物飼育活動の実践である。

##### (1) 動物飼育活動の教育的意義

いのちの大切さは、生命あるものとの触れ合いによってより一層心に刻まれていく。本来、子どもは生き物が好きである。子どもの心を揺さぶり、生涯忘れぬほど深い影響を与えるには、抱いて温かく、目を合わせると反応を示し、その感情を見てとれる動物が必要である。

子どもたちは、そのような動物に気を遣いながら世話をするうちに、動物に頼りにされ、懐かれるとかわいいと思い、その動物にとってなくてはならない自分の価値に気付くことができる。そして、自分が変容すれば動物が変容し、相互に影響しあうことを理屈でなく体験を通して学んでいく。こうした、相互の関係の中から、子どもたちは自信や自尊心を得て、他者とのコミュニケーションのとり方も体得していくのである。

##### (2) ウサギの学年飼育

西東京市立向台小学校では、飼育小屋で飼育している3羽のウサギの世話を4年生(3学級)に任せている。その意図は、卒業するまでに全員が一度は一定期間動物と接し、先に示した教育的な体験をさせたいと考えたからである。また、4年生は学年として組織的に活動できる段階であり、学校の飼育活動を任せられることにより、次の高学年における全校的な働きに向けた意識付けにも役立つことも考慮している。

具体的には、1カ月ごとに学級を変え、月の中ではグループ編成された子どもたちが週単位で、朝と夕方の2回飼育小屋の清掃、えさと水遣りを行う。仕事が済めば自由にウサギと遊べる。

なお、土日と長期休業日は、全校の子どもたちと保護者に世話を呼びかけ、親子で動物と触れ合う体制を整えている。

##### (3) ハムスターの学級飼育

低学年の中で特に2年生は、空想の世界から現実の世界へと意識が移行する段階である。この時期での適切な生き物とのかかりは、子どもたちに感情の発達を促すとともに、将来の人生に深い影響を及ぼすと



いわれている。

その意味で、2年生（3学級）はハムスターを学級ごとに飼育している。学校生活にも慣れて集団活動ができ始めるこの学年の子どもたちは、自分たちのハムスターという共通の対象を得ることにより、1年生とはちがった社会性が育ち、生き物への愛情がより一層芽生えていく。また、生活科などでの生き物体験を、年間を通して継続していくこともできる。



#### (4) 動物ふれあい教室の実施

動物と触れ合うことの教育的意義はだれも否定しない。しかし、誰がその世話をするとなるかとなると教師の中では消極的な態度を示す者がいる。動物を死なせてはいけない、臭く汚い仕事は避けたい、毎日の世話は負担が大きい、などの感情によるものである。教師の理解と意欲は、動物飼育を効果的にするための必須条件である。

子どもたちに、動物の生態、動物の抱き方、飼育小屋の掃除の仕方などについて、動物ふれあい教室を実施して、獣医師の方々から適切に指導を受けることはきわめて重要である。子どもたちに対する教育的価値と同時に、体験不足の教師への啓発にも有効な役割を果たしていく。また、活動を保護者に公開することで、飼育活動の意義について理解を得る一助ともなっている。



#### おわりに

本研究実践では、いのちの尊さを自覚して、真剣に生きる子どもの育成を目指し、①生命を多面的にとらえ、発達段階に応じて積み上げた総合単元的な道徳学習と、②いのちの輝きを確かめる活動の二つを柱にして取り組んできた。その結果、子どものこころに寄り添い内面に響く指導が展開できた。また、先に示した「死んだいのちは生き返るか」との質問を改めて行ったところ、「そう思う」との意見は4%にまで減じるに至った。

（中野区立鷺宮小学校長）